

日本語の清音と濁音の指導における中国語方言の活用

—受講者の捉え方から見る効果と課題—

劉 羅麟 (早稲田大学)

要 旨

中国語話者の日本語学習者には清音と濁音を混同する問題があり、教育現場ではその指導法に悩む教師が少なからずいる。本稿では、中国語の方言である西南官話を活用した日本語の清音と濁音の指導法を探究した。教育実践と調査を通して母語(母方言)の活用に対する受講者の捉え方を明らかにし、それらを適合性・有効性・使用しやすさ・理解しやすさ・新鮮さ・面白さ・印象深さに分類した。それを踏まえ、日本語の音声の指導における母語の活用の効果と課題を浮き彫りにした。

キーワード：発音指導、清濁の混同、無声音・有声音、有気音・無気音、中国語西南官話

1 研究の背景と目的

中国語を母語とする日本語学習者には、「大学(ダイガク)」を「退学(タイガク)」に間違えるなど、日本語の清音と濁音をうまく弁別できない者が多い。その原因は、中国語(普通話)には基本、日本語の清濁のような音韻対立がないことにある(次節で詳述)。教師が「声帯振動」という用語を用い清濁の区別について説明することがあるが、このような音声学に基づく理論的な説明だけでは、学習者にとって理解しづらい場合が多い。

一方で、中国語の方言には日本語の清濁に類似した音韻対立を有する場合がある。そこで筆者は、これらの方言話者の日本語学習者に清音と濁音の指導を行う際、その母方言の活用が可能ではないか、という考えに至った。その指導法を探究するために、中国語西南官話話者の日本語学習者を対象に教育実践を行った。本稿では教育実践とそれに伴うアンケート・インタビュー調査の結果を踏まえ、母語と母方言の活用に対する受講者の捉え方を明らか

にし、その効果と課題について考察する。なお、母方言を強調する場合を除き、以降では母語と母方言をまとめて母語と記す。

2 先行研究

まず、清音と濁音の混同が起こる原因について述べる。日本語にはカ行・ガ行やタ行・ダ行のような清音と濁音¹の区別があり、ローマ字ではそれぞれ「k/g」「t/d」と表記する。これは、無声音・有声音の対立である²。一方で、中国語（普通話）のピンインにも「k/g」「t/d」があるが、これは無声音・有声音ではなく、有気音・無気音³の対立である。

表1 日本語の無声音・有声音と中国語の有気音・無気音の比較

ローマ字または ピンインの表記	日本語		中国語	
	実際の音	例	実際の音	例
p	無声音 [p]	パ	有気音 [p ^h]	趴
b	有声音 [b]	バ	無気音 [p]	八
t	無声音 [t]	タ	有気音 [t ^h]	他
d	有声音 [d]	ダ	無気音 [t]	搭
k	無声音 [k]	カ	有気音 [k ^h]	咖
g	有声音 [g]	ガ	無気音 [k]	嘎

表1にあるように、ローマ字とピンインの表記が同じでも、日本語と中国語とでは音が異なる。しかし、その表記上の類似性から、中国語話者の学習者は両者が同じだと誤解するケースが多い。例えば、胡（2019）が中国語話者の日本語学習者37名に質問紙調査を行った結果、うち26名は日本語の無声音・有声音がそれぞれ中国語の有気音・無気音にあたりと間違えて捉えていた。このような誤解から、日本語を話す際に、有声音を中国語の無気音で代

1 日本語では濁点が付くものを濁音、付かないものを清音と呼ぶ。パ行音と対応するバ行音を半濁音と呼ぶこともあるが、本稿では記述の便宜上、清音と呼ぶ。

2 サ行音・ザ行音を除く。サ行音（「シ」以外）は一般的に無声歯茎摩擦音 [s] であり、ザ行音（「ジ」以外）は有声歯茎摩擦音 [z] と有声歯茎破擦音 [d^hz] がある。[z] の場合は [s] と対になるが、[d^hz] の場合は [s] と対にならない（「ツ」の子音の [t^hs] と対になる）。そのため、本稿ではサ行音・ザ行音を対象外とする。

3 中国語では「送気音・不送気音」と呼ぶことが多い。

用し、声帯の振動が足りず無声音になることがある。また、日本語を聞く際にも、中国語の有気音・無気音の基準で判断し、呼吸の弱い無声音を無気音だと考える結果、前述した誤解から有声音に間違えることがある。

上記では中国語の公用語である「普通話」を中心に述べたが、中国語には様々な方言がある。一部の方言には、日本語と同じような無声音・有声音の対立が存在する。その例として江蘇・浙江・上海などで話される呉語がよく挙げられるが、本稿では雲南・四川・重慶などで話される西南官話に着目する。西南官話には、[f]・[v] や [s]・[z] の対立がある（楊 1984, 孫 2011）。これらの子音は摩擦音であり、破裂音である日本語の [t]・[d] や [k]・[g] とは性質が異なる。ただし、そのいずれも無声音・有声音の対立であり、声帯を振動させるか否かで区別するという点においては共通している。そこで、西南官話話者の学習者に日本語の清濁を指導する際に、その母方言の音を用いることが可能ではないかと考え、次節で述べる教育実践の考案に至った。

3 教育実践と調査の概要

3.1 受講者と教師の背景

学習者の母方言を活用した日本語の清音と濁音の指導法を探究するために、2021年4月～5月の間、オンラインで教育実践を行った。

受講者は中国四川省と重慶市の日本語学校を通して募集した、計25名の日本語学習者である。全員、中国語を母語とし、西南官話を母方言とする。日本語学習歴は1～4年であり、音声に特化した授業を受講した経験はない。

教師（筆者）は受講者と同様、中国語西南官話の話者である。母語話者としての知識のほか、中国語と西南官話の音韻体系に関する専門知識を有する。後述する指導法を考案し、それを用いて授業を行った。

3.2 授業における母語と母方言の活用

教育実践は全5回の授業で5つの音声項目を取り扱ったが、本稿ではその第1回「清音と濁音」について述べる。授業では学習者の母語と母方言を活用しながら清音と濁音について説明し、練習を行った。その具体的な活用方法は、劉（2023）で提案されている「TP-SD」という枠組み（図1）に基づき、

筆者が考案した下記の四つである。

- ① 【問題原因の説明】：中国語（普通話）の有気音・無気音（例：他 [t^ha]・搭 [ta]）と日本語の無声音・有声音（例：タ [ta]・ダ [da]）が対応しているという誤解から、前者の要領で後者を弁別しようとし、清濁の混同が起こると説明する。
- ② 【発音方法の説明】：西南官話の無声音・有声音（例：胡 [fu]・呉 [vu]、瘦 [sou]・肉 [zou]）を例に、両者の区別が声帯振動の有無にあると説明する。また、摩擦音か破裂音かという違いがあるものの、日本語の無声音・有声音は西南官話と同様、声帯を振動させるか否かで区別すると説明する。
- ③ 【導入練習】：日本語の練習に入る前に、西南官話の無声音・有声音の練習を行い、声帯を振動させない／させる方法を意識し把握する。
- ④ 【発音方法の応用】：声帯を振動させない／させるという西南官話の発音方法を、日本語の無声音・有声音の練習に応用する。

なお、上記の③では練習の補助として、手を喉に当てながら発音し声帯振動を感じるよう受講者に伝えた。

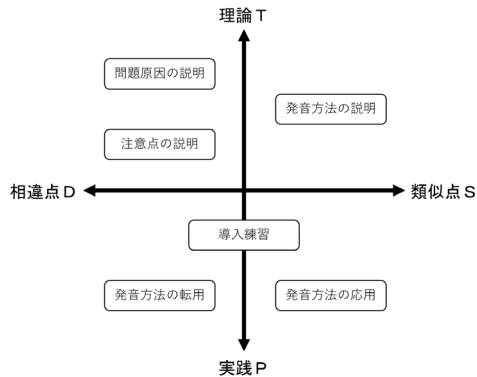


図1 母語の活用方法の枠組み「TP-SD」（劉 2023, p.115 より引用）

3.3 アンケートとインタビュー調査

2節で述べたように、学習者の母方言である西南官話の [f]・[v] や [s]・[z] は摩擦音であり、日本語の [t]・[d] や [k]・[g] は破裂音である。そのい

れも無声音・有声音の対立だが、音自体は異なる。そのため、3.2で述べた指導法（特に手順②）を、学習者が理解しやすいと感じるかどうかが、懸念が残る。そこで、学習者の実際の反応を把握するために、下記のようにアンケートとインタビュー調査を行った。

各回の授業では最後の5～10分を使い、授業内容の振り返りを兼ねて自由記述のアンケート調査を行った。質問項目は授業で何を学んだか⁴、授業で母語を活用したことについてどう感じたか、の2つである。全5回の授業終了後に、アンケートの記述が具体的であった10名に、次の流れでインタビュー調査を行った。まず、アンケートの記述の意味を確認し、詳しく語ってもらった。次に、なぜそう思うか、自身の考えを自由に語ってもらった。最後に、アンケートの記述以外に補足したいことがないか確認した。

4 アンケートとインタビューのデータの分析

4.1 コーディングの方法とその結果

佐藤（2008）を参考に、アンケートの記述とインタビューの語りの文字化データを、定性的コーディング（帰納的アプローチ）で分析した。具体的には、まず、データから「母語の活用に対する捉え方」に関連する部分を特定し、抽象度の低いラベルを付けた。次に、抽象度を上げ、ラベルを概念化しコードを抽出した。そして、コード同士の関係性を検討しカテゴリーに分類した。最後に、コードとカテゴリーを再検討し、統合・分割・移動・再定義の作業を行い、最終的なコードとカテゴリーを確定した。以降ではラベルを[]で、コードを〈 〉で、カテゴリーを《 》で括る。

上記のように定性的コーディングを行った結果、母語の活用に対する捉え方を《理性的》と《感性的》の2種類に分類した。《理性的》に関しては、母語の活用の〈有効性〉〈適合性〉〈理解しやすさ〉〈使用しやすさ〉に関する捉え方があった。《感性的》に関しては、母語の活用の〈新鮮さ〉〈面白さ〉〈印象深さ〉に関する捉え方があった。

4 授業を通して受講者が得た学びについては、劉（2022）で報告している。

4.2 母語と母方言の活用に対する《理性的》な捉え方

4.2.1 〈有効性〉に関する捉え方

母語の活用の〈有効性〉に関して受講者からは、[発音方法を明確に把握できる][二つの音の違いを感知できる]という捉え方があった。一方で、[(-)ほかの方法より有効かは分からない]という、否定的な(もしくは否定に近い)捉え方もあった。紙幅の都合上、以下では[発音方法を明確に把握できる]に関する受講者の語りを例に述べる(受講者の名前はすべて仮名)。なお、これらの語りは原文の中国語(西南官話)から筆者が和訳したものである。()内は前後の文脈で省略された内容の補足であり、{ }内は状況に関する説明である。下線は特に注目したい箇所を表す(4.2.2以降も同様)。

筆者：{アンケートを指しながら}「四川方言の清濁で(声帯)振動を感じて、それを日本語の清濁の振動に応用する方法はとてもいい。」と書いていましたが、この「とてもいい」というのは、どういう意味で「いい」か教えてもらえますか？

サイ：四川方言は母語ですから、馴染みがあるんです。それで四川方言を通してその位置、発音の位置を、より具体的に見つけられます。そしてそれを日本語に応用します。日本語は母語じゃないですから、学習している言語ですから、その位置についてどんなに説明してもらっても、実際のところ身をもって感じられないんです。(中略)直接どのように発音するかを詳しく説明してくれても、当てている(推測している)ような感じです。例えば、私が発音して先生に直してもらうとか、実際自分はぼんやりとしています。思っています。先生に「合っています。サイさん、発音合っていますよ。」と言われても、でも自分は「え、本当か？」という感じです。自分では(今の発音は)さっきと同じ気がするんだけど、なぜさっきは間違っていて、今は合っているのかと感じます。(中略)もし母語を使ったら、自分の発音が合っているかとても明確にわかります。

上記のように、受講者サイは調音位置に関する理論的な説明だけではそれを「身をもって感じられ」ず、「当てているよう」で「ぼんやりとしてい」と語る。教師に発音が「合ってい」と言われても、自分では「なぜさっ

きは間違っていて、今は合っているのか」が分からない。一方で、母方言の四川方言（西南官話の一種）にある音を用い、調音位置を「より具体的に見つけられ」「自分の発音が合っているかとても明確にわか」る。つまり受講者は、母語の音を用いることで発音に対する明確な基準ができ、日本語を練習する際に自身の発音の正誤を判断できるようになる、と捉えている。

一方で、[(-) ほかの方法より有効かは分からない] については、下記の語りがあった。

筆者：{アンケートを指しながら}「四川方言は私個人的に使う（機会）があまり多くないので、このような学習方法は私の日本語の音声の学習にとってより有効なのかどうかはわからない。」と書いていましたね。ここには、「より有効か」と書いてあるので、これはほかの何らかの方法と比較しての「より有効か」（という意味）ですか？それとも…？

モウ：うーん…発音については、私は比較的、伝統的な（学習方法）があると思います。（中略）先生が録音を再生して、（録音に）続いて一文ずつ発音して、それを録音して後で聞いて、そして比較します。つまり、私の発音と録音、その録音とはなぜ違うのか、どこが違うのか（について考えます）。それで先生やクラスメートに指摘してもらって、私の発音のどこが間違っているのかを。そして、例えばもう一回頑張って録音して、そして聞いて、このように繰り返します。

上記のように、受講者モウは自身にとって母方言を使用する機会が減少したため、母方言の活用が「伝統的な」学習方法と比べ「より有効なのかどうかはわからない」と語る。モウが考える伝統的な方法とは、録音の模倣、録音と自身の発音の比較、先生やクラスメートの指摘、問題点を把握したうえでの再挑戦、といった過程の繰り返しである。つまり受講者は、自身の言語使用状況から、母方言の活用の相対的な有効性を否定的に捉えている。

4.2.2 〈適合性〉に関する捉え方

母語の活用の〈適合性〉に関して受講者からは、[方言話者の学習者に向

いている] [初心者の学習者に向いている] [外国語の学習経験が少ない学習者に向いている] という捉え方があった。以下では [外国語の学習経験が少ない学習者に向いている] に関する受講者の語りを例に述べる。

筆者：母方言を活用した練習方法が理解しやすいと、ランが語った後に練習する時に、まず四川方言で、四川方言の言葉を発音して、清音とは何か、濁音とは何かを確認しましたよね。(中略) この方法と、四川方言を導入として使わないのと比べて、この二つは、うーん…難易度とか、理解しやすさとかについて、何か考えありますか？

ラン：これは間違いなく、導入する必要があると思います。直接発音するのは、たぶん…例えばもしこれまで外国語を勉強したことがなかったら、振動するとは何か、振動しないとは何か、わからないかもしれません。(中略) 発音したこの音、話したこの文、この字、この音を、どのように発音しているのかは、完全にこういう意識がないです。まずは、まずは導入する必要があると思います。まずは概念について少し把握してもらう必要があります。つまり、「あーこの二つは違うんだ。こういう理由で違うんだ。」のように(把握してもらいます)。そして、それから外国語のほうに入ったほうがいいのかと思います。(中略) 最も馴染みのある言語、つまり母語を使うのは、本当にとても役立つと思います。

上記のように、受講者ランは日本語の前に「外国語を勉強したことがなかったら」、声帯が「振動するとは何か、振動しないとは何か、わからない」可能性があると言っている。なぜなら、そのような学習者は、普段自身が「どのように発音しているのか」を意識していないからだという。そのため、母方言にある無声音・有声音を例として導入し、声帯振動という「概念について少し把握してもらったあとに」、「外国語のほうに入ったほうがいいのか」という。つまり受講者は、馴染みのある母語の活用により発音において重要な概念(声帯振動)が理解しやすくなり(4.2.3 参照)、特に外国語の学習経験の少ない学習者にとって役に立つ、と捉えている。

4.2.3 〈理解しやすさ〉に関する捉え方

母語の活用の〈理解しやすさ〉に関して受講者からは、[発音方法を理解しやすい][二つの音の違いを理解しやすい]という捉え方があった。一方で、[(-) 母語から説明する目的をすぐに把握できない]という、否定的な（もしくは否定に近い）捉え方もあった。以下では[発音方法を理解しやすい]に関する受講者の語りを例に述べる。

筆者：|アンケートを指しながら| まずはこの前半の部分がどういう意味かについて説明してもらえますか？なぜ（西南官話の無声音・有声音で日本語の清濁を説明するのが）「とても理解しやすい」と思いましたか？

ラン：それは四川方言には…私の普段話している言語の習慣にあるもの（音）だからです。それで説明してくれると、何の話をしているのが当然わかります。でももし言語学のようなそういう音声の知識で、清とは何か、濁とは何かを説明してくれると、とても長くなるし堂々巡りしてしまうかと思います。しかし直接に、普段話している（母方言の）これが清音でこれが濁音だと説明してくれると、とても具体的な例になるので、で、とても理解しやすいです。（中略）私が英語を勉強していた時に（英語の先生が）「これが清音でこれが濁音ですよ」と説明してくれて、そして言語学の用語を投げつけてくる（中略）そういう方法は、まずは理解の段階で困難を多くきたしてしまいます。

上記のように、受講者ランは以前英語の授業で受けた、「言語学の用語を投げつけてくる」ような説明は「堂々巡りして」「理解の段階で困難を多くきたしてしま」うと語る。一方で、母語を活用した説明では、「普段話している言語の習慣にある」音が「具体的な例になる」ため、「とても理解しやすい」という。つまり受講者は、音声学に基づく理論的な説明より、母語にある音を用いた説明のほうが理解しやすい、と捉えている。

一方で、[(-) 母語から説明する目的をすぐに把握できない]については、下記の語りがあった。

サイ：|母語の音で日本語の音を説明するのが理解しやすいと語った後に|

でも時々導入の時に、すぐにわからない時もあります。(中略) 私は今四川方言を勉強しているのか、それとも四川方言を日本語に应用するためのものがよくわかりません。たぶん最初は日本語の部分にまだ、入っていないくて、(日本語の例と) 結び付けられていないから、それで少し、(母語に関する説明が日本語と) 少し、少し離れているような感じがありますので、最初は少し理解しづらいです。

上記のように、受講者サイは導入の部分で母語(母方言)について説明する際に、「方言を勉強している」か「日本語に应用するため」か、「最初は少し理解しづらい」と語る。つまり受講者は、日本語の授業で母語から説明する目的を最初は理解しづらかった、と捉えている。

4.2.4 〈使用しやすさ〉に関する捉え方

母語の活用の〈使用しやすさ〉に関して受講者からは、[練習方法が実用的だ][練習を始めやすい][発音を直しやすい]という捉え方があった。一方で、[(-)母語の発音方法をすぐに日本語に应用できない]という、否定的な(もしくは否定に近い)捉え方もあった。以下では[練習を始めやすい]に関する受講者の語りを例に述べる。

筆者：では、この学習方法の難易度については、どう考えますか？

モウ：ハードルが低いと思います。始めやすいと思います。これは主に、さっきも話した(母語と日本語の)対比が個人的に好きですから。対比してその異同を見つけて、そして練習を通して強化するのが。(中略)つまり直接、うーん、自分で盲目的に、(聞こえた音に)続いて模倣するのと比べてね。

上記のように、受講者モウはモデル音声に続く「盲目的」な「模倣」よりも、母語と日本語の比較を通して発音上の「異同を見つけて」から練習する方法が、「ハードルが低」く「始めやすい」と語る。つまり受講者は、単なる音の模倣よりも、言語間の比較を踏まえた練習がしやすい、と捉えている。

一方で、[(-)母語の発音方法をすぐに日本語に应用できない]については、下記の語りがあった。

筆者：{アンケートを指しながら} 最初は(清音と濁音の)「違いを強く感

じられなかった。」と書いていましたが、当時はどのように感じていたか、なるべく思い出してもらえますか？

サイ：(前略) 最初は四川方言にある清濁について説明する時に、その時は、ただ四川方言の清濁について説明しているだけだと感じていました。そして急に日本語になった時に、なんかうまく関連付けられないと感じていました。(中略)すぐに応用できないという感じです。

筆者：なるほど。すぐに応用できないという意味ですね。(中略)「その後単語で練習する時には、区別しようと意識して、そして先生の肯定を得て、初めて自分の方法を認めた。」と書いていましたが、この後半の部分がどういう意味か、もう少し詳しく教えてもらえますか？

サイ：最初は単語の数がやや少なめだからかな。(中略) 同じ清音とか、同じ濁音とか、いろんな単語に出てきたので、それでだんだん感じられるようになりました。 あーさっきの説明はこういう意味なんだと。(中略) そしてほかのクラスメートが答えて、その発音に対して先生がフィードバックしてくれた後に、それでだいたいわかってきました。 正しい濁音と清音とはどのようなもので、そして正しくないのはどのようなものかが。(中略) 最初は実は(その違いを)感じられなかったんです。なぜなら、私の印象では、「タイヤ」と「ダイヤ」の違いは、「ダイ」のほうが私は、舌を(歯茎に)より強く当てると思っていました。喉あたり(声帯)のほうで区別するとは考えたことはありませんでした。

上記のように、受講者サイは母語と日本語を最初「うまく関連付けられ」ず、「すぐに応用できない」と感じたと言語。その原因は、声帯を振動させるという発音方法が、以前考えていた「舌をより強く当てる」という方法と違ったことにあると語る。その後、「いろんな単語」の練習を通して、教師の「フィードバック」で「肯定」を得て、正しい発音が「わかってき」という。つまり受講者は、練習を経て教師によるフィードバックをもらうまでは、母語の発音方法をすぐに日本語に応用できない、と捉えている。

4.3 母語と母方言の活用に対する《感性的》な捉え方

4.3.1 〈新鮮さ〉に関する捉え方

母語の活用の〈新鮮さ〉に関して受講者からは、[母語の音で日本語の音を説明するのが新鮮だ] [母語の音で日本語の音を練習するのが新鮮だ] という捉え方があった。以下では [母語の音で日本語の音を練習するのが新鮮だ] に関する受講者の語りを例に述べる。

カカ： {これまで受けた授業を思い出しながら} その時は（先生が）主に 口の形で説明していました。喉とか、声帯振動とか、それで（清音と濁音を）区別していました。そして模倣しながら勉強していました。（中略）先生の発音方法を模倣します。発音を聞いて、どのような発音方法なのかを聞きます。（中略）でも彼（当時の先生）とあなた（筆者）の説明の方法は違います。あなたは日常生活の自分の（母方言の）発音を例にして、それを通して感じて、感覚を掴むんですよ。それで日本語のほうに应用する、ここに違いがあります。（中略）比較的新鮮です。初めてこういう（練習方法）があるのを知りました。

上記のように、受講者カカはこれまで「喉とか、声帯振動とか」の説明を受け、教師の「発音方法を模倣」する形で勉強していたと語る。そのため、母語（母方言）の音を通して声帯振動の「感覚を掴」み、「日本語のほうに应用する」のが「比較的新鮮」だという。つまり受講者は、初めて触れた母語を活用した学習方法が新鮮だと感じる、と捉えている。

4.3.2 〈面白さ〉に関する捉え方

母語の活用の〈面白さ〉に関して受講者からは、[母語の音に関する説明が面白い] [母語の音で日本語の音を説明するのが面白い] [母語の音と日本語の音を比較するのが面白い] [母語と日本語の音声を同時に学習できるのが面白い] [母語の活用と身体の活用の融合が面白い] という捉え方があった。以下では [母語の音と日本語の音を比較するのが面白い] に関する受講者の語りを例に述べる。

ルル： {授業での説明が詳しいと語った後に} とても面白いです。とても。

筆者：面白く感じるのはなぜなのか、もう少し詳しく説明してもらえますか？

ルル：うん。比較があるから面白いです。中国語と比較していたじゃないですか。参照（の対象）があるから、それで「あ、違うんだ」と気づくわけです。それで例があって、生き生きとした例があるから、面白く感じるんです。（中略）例えば清音と濁音で、私の名字は「胡」[fu]とか、私の名字は「呉」[vu]とかのようなのがありましたよね。（中略）私が思うには、比較があれば、生き生きとして、直観的になるから、それで面白く感じるんです。なぜなら、これは私の母語と関連しているから、私にとって馴染みがあるから、より知りたくなるんです。（中略）英語と比較したって、私的には興味がないと感じますから。英語が上手じゃないですし。母語を使って、私にとって馴染みのあるものを使って比較してくれれば、とても興味があると感じます。

上記のように、受講者ルルは中国語と日本語の「比較があれば、生き生きとして、直観的になるから、それで面白く感じる」と語る。対して、英語と日本語の比較には「興味がない」。なぜなら、中国語が母語で自身にとって「馴染みがあるから、より知りたくなる」という。つまり受講者は、第三の言語よりも、母語と目標言語を比較するのが面白い、と捉えている。

4.3.3 〈印象深さ〉に関する捉え方

母語の活用の〈印象深さ〉に関して受講者からは、[母語の音で日本語の音を説明するのが印象深い] [母語の音で日本語の音を説明することで印象に残りやすい] という捉え方があった。以下では [母語の音で日本語の音を説明するのが印象深い] に関する受講者の語りを例に述べる。

筆者：{アンケートを指しながら}「二点印象深かったのがあって、一つは、四川方言の「瘦肉」[sou.zou]で清音と濁音を区別することだ。そして「こんな方法もあったんだと感じた。」と書いていましたが、もう少し具体的に教えてもらえますか？この「印象深かった」というのは、どういう感じですか？

カネ：(印象が) 深かった原因は、以前一度も、その、母語の角度から、母語のほうから発音の違いを探して、それを第二言語の学習の過程に応用することはなかったですから。正直私たち、少なくとも私が日本語を勉強してきた(経験)という角度から言うと、私は使ったことがなかったです。その、自分のこの母語、そしてこの方言を使う方法で、その発音の習慣を第二言語の学習に応用するとか。

上記のように、受講者カネは母方言にある音で日本語の「清音と濁音を区別すること」に、「こんな方法もあったんだと感じ」「印象深かった」と語る。それは、これまでの学習経験で母語と母方言の「発音の習慣を第二言語の学習に応用する」ことがなかったからだという。つまり受講者は、母語を活用した学習方法が新鮮(4.3.1 参照)なため印象深い、と捉えている。

5 考察

5.1 母語と母方言の活用の効果

本項では、前節で分析した受講者の捉え方を踏まえ、日本語の音声の指導における母語(母方言)の活用の効果について考察する。

まず、母語の活用の〈新鮮さ〉(4.3.1)と〈面白さ〉(4.3.2)と〈印象深さ〉(4.3.3)から、日本語の音声に対する学習意欲を喚起する効果があると言える。受講者はこれまで五十音図で日本語の音を逐一学習し、単語で反復練習を行ったが、このような学習方法では興味が湧かなかった。一方で、母語にある音を日本語に応用するという学習方法に初めて触れ、新鮮で印象深いと感じた。学習内容が自身の母語と関連付けられているため、知りたいという気持ちが強まった。また、英語のような第三の言語よりも、馴染みのある母語を活用したほうが興味が掻き立てられると語った。

次に、母語の活用の〈適合性〉(4.2.2)と〈理解しやすさ〉(4.2.3)から、日本語の音声に対する理解を促進する効果があると言える。受講者はこれまで音声学に基づく理論的な説明を受けたことがあるが、そのような説明だけでは理解しづらかった。一方で、母方言の無声音・有声音を例に説明することで、日本語の清音と濁音の区別とその発音方法が理解しやすくなった。特に、日本語を学習する前に外国語の学習経験が少ない学習者の場合、普段自

身がどのように発音しているかを意識していないことが多い。このような学習者にとって、母語を導入練習として活用することで、発音に対する意識化が促され、その後の説明が理解しやすくなるという意見があった。

最後に、母語の活用の〈有効性〉(4.2.1)と〈使用しやすさ〉(4.2.4)から、日本語の発音練習における困難を軽減する効果があると言える。受講者はこれまで教師の発音や教材のCDなどのモデル音声を模倣する形で練習していたが、自身の発音が合っているかどうか確信が持てなかった。教師から肯定的なフィードバックをもらっても、発音の正誤の判断基準に戸惑っていた。一方で、馴染みのある母語から出発することで、単なるモデル音声の模倣よりも練習を始めやすくなった。練習する際においても母語の音で明確な判断基準ができ、自身の発音の正誤を判断できるようになった。

5.2 母語と母方言の活用の課題

前項では母語（母方言）の活用の効果について考察したが、受講者による否定的な捉え方を踏まえれば、以下のような課題も見えてきた。

第一に、母語を活用する目的を学習者に共有し、その目的に対する共通認識が得られていることを確認する必要がある。受講者からは、日本語の授業において母語から説明する目的をすぐに把握できず、理解しづらい時があるという意見があった。原因の一つとしては、受講者が母語を活用し日本語の音声を学習するという方法に慣れていないことが挙げられる。そのため、母語を活用した指導を行う際には、なぜ母語について言及するか、それが日本語とどう関連しているか、より丁寧に説明することが望ましい。

第二に、学習者が母語を活用し日本語の発音を練習できるように、教師によるサポートが必要である。受講者からは、二つの言語を最初はうまく関連付けられず、母語の発音方法をすぐに日本語に応用できないという意見があった。特に、これまで正しいと考えていた発音方法（舌を歯茎に当てる際の力強さ）が、実際の発音方法（声帯振動の有無）と異なった際に戸惑うことがある。そのため、練習の際には、教師が学習者の理解を確認したうえで母語と日本語との関連性について補足することや、発音に対してフィードバックを行うことなどの個別のサポートが求められる。

第三に、母語（母方言）の使用頻度はその活用に対する学習者の捉え方に影響することを考慮する必要がある。受講者からは、自身にとって母方言を使用する機会が減少したため、母方言の活用がほかの方法より有効かどうか不明だという意見があった。これとは対照的に、母方言こそが自身の「真の母語」だと考え、その活用に対して肯定的に捉える受講者も多い。このように、母方言の使用頻度とその活用の有効性に対する学習者の捉え方に影響する（母語に関しても同様だと思われる）。そのため、学習者が母方言や母語をどのくらい使用しているか、そしてその活用についてどう考えるかを把握することが、授業（特に一斉授業）の円滑な展開に重要だと思われる。

6 まとめと今後の課題

本稿では、中国語西南官話話者の日本語学習者を対象に教育実践を行い、その母方言にある無声音・有声音を活用した日本語の清音と濁音の指導法を探究した。アンケートとインタビューのデータを分析し、母語（母方言）の活用に対する受講者の捉え方を明らかにした。受講者は理性的に（適合性・有効性・使用しやすさ・理解しやすさ）、または感性的に（新鮮さ・面白さ・印象深さ）、母語の活用を捉えていることがわかった。それを踏まえ、日本語の音声の指導における母語の活用の効果と課題を浮き彫りにした。

本稿の研究結果から、学習者の母語（母方言）を活用した日本語音声教育の可能性が見えてきた。今後は実践と研究を続け、その方法論をさらに改善し発展させていきたい。ただし、今回は母語の活用の有効性などに関して受講者から肯定的な意見が多く得られたが、清音と濁音の発音や聴取が実際に改善されたかどうかは不明である。今後は事前・事後テストを授業に組み入れることにより、受講者の実際の発音や聴取の変化を明らかにしたい。

参考文献

- 胡偉（2019）「中国人学習者による日本語の破裂音の習得に関する考察—学習者の意識と学習リソースを中心に—」『早稲田日本語教育学』26, pp.87-105, 早稲田大学大学院日本語教育研究科
- 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法—原理・方法・実践—』新曜社

- 劉羅麟（2022）「日本語の音声の授業における学習者の母語の活用—学習者が得た知識面・認識面・運用面の学び—」『日本語／日本語教育研究』13, pp.169-184, ココ出版
- 劉羅麟（2023）『日本語の音声の習得と教育における母語の役割—学習者の母語と母方言を活用した音声教育を目指して—』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士学位論文〈<http://hdl.handle.net/2065/00094211>〉
- 孙越川（2011）《四川西南官话语音研究》浙江大学博士论文
- 楊時逢（1984）《四川方言調查報告》臺北：中央研究院歷史語言研究所